



## 日本の象徴デス

松本 侑壬子・ジャーナリスト

もはやフジヤマ、ゲイシャなどではない。トヨタ、ホンダ、ソニーを経て、今や、世界に向かって日本を代表するのは、マンガとオタク文化—そして、実は日本式トイレである!? かのマドンナも、来日の折りに初体験し、いたく感激したとか。南仏リヨンでも、自宅に「日本のトイレ」を設置、「開通記念」パーティーを開いたところ、50人もの客が押し掛けたと、私自身の友人の実話である。

本作の題名は、正しくは「ウォシュレット」であろう。他にも昔懐かしい「足踏みミシン」とか「手作りギョーザ」、「プラスチック・フィギュア（プラモデル）」など、ニッポン的香りのする小道具がワサビを効かせている。

カナダ・トロント。引きこもりの兄モーリー、プラモデルオタクで企業の実験室で働く次男レイ、突撃型の生意気女子大生リサの3兄妹の住む家には、母が亡くなる直前に日本から呼び寄せた“ばーちゃん”（もたいまさこ）がいる。一言も英語を（日本語も）しゃべらず、眼鏡の奥の目は開いているのかいないのか、何を思っているのか、1日中二階のママの部屋で猫を抱いたまま窓の外を見ている。3人がばーちゃんをめぐるあれこれ推察するやり取りが見当違いのようで案外当たっているようで、おかしい。ばーちゃんの1番の謎は、毎朝の長便所の後の深いため

息だ。あれは、なぜだ？

何事も白黒はっきりさせたいタイプのレイは、気になって仕方がない。職場のインド人の同僚にこの疑問を漏らしたところ、わが国は左手で、水で…とトイレ文化について語り始める。そして日本のトイレが「ただのトイレではない、日本の偉大なテクノロジーである」と聞くに及んで、がぜん、ばーちゃんの謎解明に燃え…。

言葉をまったく介さないで、ばーちゃんと3人の若者（孫）たちの気持はゆっくりと混じりあい、共通のものとなっていく。互いを思いやること、相手をよくよく見ること、心を開くことで、気持が1つになっていくのだ。

モーリーは、優れたピアニストだがパニック障害でこの4年間一歩も家の外に出られなかった。思い切って外出したのは、ある強い念願からで、それにはばーちゃんの助けが必要だった。ばーちゃんは自分の札入れから2枚を取り出して、無言で渡してくれた。その分厚い札入れは、ばーちゃんが家財産すべて処分して、カナダの娘（モーリーらの死んだ母親）のところに来たことを物語っている。ばーちゃんにもここしか居場所はないのだ。

自作のロングスカートををはくことで自分を取り戻したモーリーの再出発の場で、ばーちゃんがどんなに痛快に孫の危機を救ったか。ばーちゃんのために設置したウォシュレットで、レイがいかに至福の初体験を味わったか。母親の死でばらばらになった兄妹が、物言わぬばーちゃんを中心に、いつの間にか家族として再生し、自立していく姿が笑いの中に温かく描かれる。

「バーバー吉野」、「かもめ食堂」、「めがね」の荻上監督が、日本語なしで日本文化の普遍性を鮮やかに逆照射してみせる。快心の作である。

## 『トイレット』

日加合作映画（109分）／荻上直子監督

新宿ピカデリーほか全国順次公開

©2010 “トイレット” フィルムパートナーズ

